

8月10日付の奈良新聞記事を読んで驚いた。8年後の国民スポーツ大会(国体)が奈良県での開催が内定している。この大会の陸上競技は大阪市長居陸上競技場の施設を借りるという知事の発言が掲載された。40年ぶりの開催を心待ちしている県民の心に冷水を浴びせる発言である。そもそも国民体育大会(国スポ)は戦後間もない1946(昭21)年、戦後の混乱からスポーツを通して立ち上がる気力をもたらしたいとの思いから発足したものである。戦火の被害が少なかった京都を中心に近畿地区で第1回大会が開かれ、奈良県でも橿原公苑にお

国スポ・全スポへの思い

いて相撲・自転車競技が行われた。その後も本県開催は54(昭29)年、北海道開催が内定した9回大会、気候の関係で夏季大会返上の声に、当時奈良県水泳連盟会長で、県体育協会会長であった中山正善氏(天理教2代真柱)

(セーリング)は、兵庫県芦屋市の会場を借りての開催となった。しかし県選手の日常のトレーニング場として、斑鳩町のため池を所有者の厚意で改造して利用、地元県立斑鳩高校にクラブを設置して活躍。国体後も所有

ング、ボート、カヌーなどの競技を育て、開催市町村には施設ができて、国体後の市町村民のスポーツの振興に大きな役割を果たしてきた。一方、陸上競技はあらゆるスポーツの原点、記録への挑戦がす

主役は県民、地元開催を

の計らいで、天理ブルーの提供を申し出られ、競泳、飛び込みは天理ブルー、水球は県立郡山高校ブルーで開かれた。

84(昭59)年、県民念願のわかくさ国体(奈良国体)を開催、海のない本県では開催できないヨット競技

者の支援もあつて継続、斑鳩高校(現法隆寺国際高校)は毎年各種大会に出場、インターハイ総合優勝を遂げるなどの活躍を見せ、全国でもその名をど

べてである。競技場が公認であることは競技者にとつて最も重要なこと、公認競技場が身近にあることも、競技を続ける上で必要なこととは言うまでもない。わかくさ国体が内定した40数年前、陸上競技場の建設について紆余(うよ)曲折議論が

あつたが、結局競技関係者と奈良市の意向で、鴻ノ池陸上競技場が会場となった。しかし、国体後も県内には第1種公認陸上競技場の建設は進まず、過去40年奈良市民の施設は、県大会など優先で使用され、市民のスポ

ーツは制限されてきた。県は本年3月、奈良県スポーツ推進計画を策定、2031年開催の「国スポ・全スポ」開催を通して、県民の生涯スポーツ振興のできる環境整備を行い、健康増進、スポーツ人



わかくさ国体開会式で入場行進する県選手団(中央手前が著者) 1984年

口の増大、地域の活性化を進めると明記されている。

国民体育大会80年の歳月には、地方持ち回り開催は何回もピンチに立つことがあつた。しかし、日本体育協会(現スポーツ協会)など関係者の努力で、大会開催の意義と、将来の日本の成長発展のために、知恵を絞る努力を重ねて今日を迎えている。50年振りに迎える「国スポ・全スポ」奈良大会、県民挙げての催しであり主役は県民にある。

私も8年後には99歳、人生100歳の時代、健康を維持しマイペースのトレーニングに励み、本番は聖火ランナーに選ばれて走る夢を抱いている。走る会場は地元奈良がいい。

第2、4土曜日掲載予定